

縄文農耕

◆ 興隆溝遺跡とは

中国東北方における先史時代の遺跡。遼寧省西部にあり、8000～7000年前の文化であり、新石器時代にあたる。低い丘陵に立地する環濠集落であり、栽培キビ、アワとみられる大型の種子が出土している。ブドウ等の種子もでており、採集・狩猟ならびに栽培文化との関連は興味深い。

◆ 縄文農耕とは

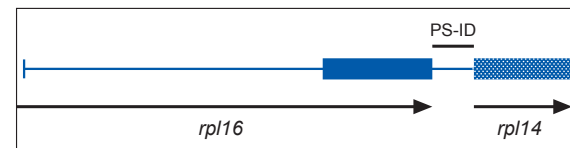
従来の考え方では、縄文時代は採集・狩猟、ならびに漁労文化であり、弥生時代から栽培行為が始まるとされていた。一方、縄文時代の遺跡跡から出土する遺物にはイネの痕跡であるプラントオパール(Phytolith)やその他の大型イネ科種子、マメ科種子などの炭化物がみられる。また、三内丸山遺跡では大量に出土するクリの遺物からのDNA分析による結果から、管理栽培が始まっていたのではないかと結論された。このような状況証拠から縄文農耕があったとされている。

◆ DNA考古学とは

植物遺物からDNAを抽出すること行われている。クリから得られたDNAはPCR法というDNA増幅技術により解析が進められた。ゲノムDNAからの遺伝情報に多様性をみるRAPD解析により、野生のクリよりも三内丸山遺跡から出土したクリに人為的選抜が進んでいたものとされた。上図はブドウ属種子DNAの単純繰り返し構造の塩基配列である。これらは主識別や多様性の指標として遺物にも応用可能な配列であり、ブドウにもDNA考古学的手法を適用する際に使用可能な遺伝標識である。

Vitis vinifera TACG-TCGGGG-AATAGCGG
V. ficifolia TACA-TCGGGA-AATAGCGG
V. coignetiae TACA-TCGGGG-AATAGCGT

予 定		
13:00	はじめに	
13:05-13:25	三内丸山遺跡の全体像	中村美杉
13:25-13:45	狩猟採集文化と縄文	羽生淳子
13:45-14:00	討論	佐藤洋一郎
14:00-14:10	休憩	
14:10-14:20	第2部はじめに	石川隆二
14:20-14:40	Harappa遺跡の植物利用	Steven A.Weber
14:40-14:50	江蘇省高郵市龍虬庄遺跡の炭化米	湯陵華
14:50-15:10	興隆溝遺跡と植物遺物	王 巍
15:10-15:30	大陸先史文化と縄文文化の接点	岡田康博
15:30-15:50	縄文農耕と風土	佐藤洋一郎
15:50-16:30	討論	石川隆二



◆ ヤマブドウ

ブドウ属のうち西洋ブドウ (*Vitis vinifera*) は、野生種 (*Vitis sylvestris*) から2000-3000年の過程を経て、4.5mmから7mmの種子を得るようになり、同時に雌雄同株となることで栽培種として成立した。東洋ブドウには日本のヤマブドウ (*Vitis coignetiae*, 写真下左種子) もいれて数種含まれる。しかし、いずれも雌雄異株であることなど野生種として利用されているにすぎない。ただ、青森県のヤマブドウが他県系統に比較して、大粒であることなどを指摘する栽培者もいる。一方、三内丸山遺跡からも数多くの種子が出土している (写真下右種子)。これらは一概に6000年前には小粒であった。この歳月における人為選抜、環境変異、遺伝変異などの要因が考えられるが今後の調査により明らかにされることであろう。

◆ 縄文農耕による人為選抜はあったのか

三内丸山遺跡の膨大な、継続的な資料の集積ならびに遺物として発掘された数千年分の地層資料からはこれからも多くの考察を研究者に与えてくれることであろう。

